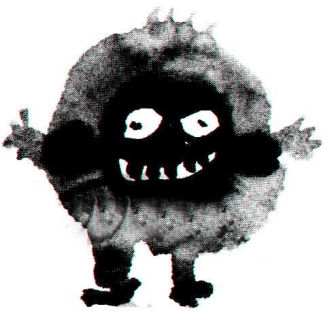
深夜草紙　五木寛之

深夜草紙

五木寛之



part 6

朝日新聞社

深夜草紙 PART6
定価——一、〇〇〇円
著者——五木寛之

一九八一年六月二十日　第一刷

発行者——初山有恒
印刷所——明善印刷
発行所——朝日新聞社
東京都中央区築地五—三—二　郵便番号一〇四
電話代表〇三（五四五）〇一三一　振替東京〇—一七三〇
〔編集〕図書編集室　〔販売〕出版販売部

© H. ITSUKI 1981 0395-254766-0042

深夜草紙

PART 6

目次

赤い靴はどこへ　9
年頭の決意　15
藤圭子讃江　22
増上寺の木魚　27
書評ふうでなく　32
午後の対話　38
スパゲティとスパイ　46
時刻の黙し録　53
マンハッタンの雪男　59
リオからの帰途　65
それぞれの足　71
雨の日の雑談　77

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時は流れて　84
ついてない一日　89
幼児に車　95
京都好日　100
一冊の絵草子　106
犬死でない死　111
時の扉に　117
仏頂面の文章　124
五十年前の光州で　129
福岡の街で　141
十五年前のきょう　147
人と会う話　154

羞恥心のさまざま　160
小説家たち　165
わが水底の歌　171
ボーナスの出た日　176
モスクワ空港にて　181
黒海のほとりで　186
ブルガリア好日　192
ソフィアの夏　197
冷夏の夢　203
アンケートの季節　209
飛び飛びの記　214
右往左往の日々　219

夜の地震 225
昼間のみみずく 232
『ある講演会にて』 237
東西モノ談議 243
録画親しむの候 249
ワンパターンのタ 254
異国面白読物偏評 260
読者からの手紙抄 265
映画の中の女たち 271
忘れ草の記 277
高校生ブルース 283
退場の弁 288

装画――村上豊　装幀――多田進

深夜草紙

PART
6

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

赤い靴はどこへ

古賀政男さんと私は、田舎が一緒だが、生前お目にかかったことはない。〈赤い靴のタンゴ〉という曲があって、私はこの歌が好きだった。

〈誰がはかせた赤い靴よ

と、いう文句ではじまる歌だが、いつ、どこでおぼえたのか、どうしても思い出せない。赤い靴、といえば、

〈赤い靴はいてた女の子

という童謡もいい歌だと思う。原田芳雄さんのLPに、〈赤い靴の憂歌〉というのがあって、こ

れも好きだ。〈憂歌〉とは、たぶん、ブルースのことにちがいない。

古賀政男さんは、たしか生前、タンゴの本家のアルゼンチンへもいかれたはずだ。ブェノスアイレスで、タンゴ・バンドの指揮をされたという記事を読んだおぼえがある。

こんど〈中南米音楽〉という雑誌の企画で、ひさしぶりにアルゼンチンからタンゴのオルケスタが日本へやってくるらしい。読売新聞に社告が出ていたから、読売が協賛するのだろう。野球につぎこむエネルギーの何百分の一以下でもこういうことに使えば、読売の部数ももっとのびるはず。音楽好きの読者のほうがスポーツ好きの読者よりはるかに多い、という単純な事実に新聞社もようやく気付いてきたのだろうか。

プロ野球の紅白合戦に当るオールスター戦の視聴率と、紅白歌合戦の視聴率とをくらべただけでも、そのことは一目瞭然のはずなのに。

ロックンロールにしろ、ディスコ・サウンドにしろ、新しい音楽の波が世間にひろがってゆく時は、ほとんどの場合、踊りをともなう。

過去においては、ワルツもそうである。ワルツが熱病のようにヨーロッパを席捲していた頃のウィーンには、数えきれないほどのダンスホールがあって、夜明けまで善男善女が踊り狂っていたそうである。

そのワルツ・フィーバーがどんなに凄いものだったかは、次のような事例ひとつ見ても判る。

すなわち、ワルツを踊らせるホールには、踊っている最中に産気づいた婦人のための救急設備をそなえなければならない、という条例が課せられていた。

こういうのを何条例というのかはわからないが、そういう事件が何度もおきたからこそ、当局もダンスホールに妊婦のための施設を作らせたのだろう。すなわち、大きなお腹をかかえた臨月の御婦人がたまでが、夜を徹してウインナ・ワルツを踊り狂うというほどの大流行ぶりだったわけだ。

後にタンゴがヨーロッパへ渡って、第一次黄金時代を現出せしめた時にも、同じようなタンゴの踊りが人々を熱狂させている。

私だって、はばかりながら、ジルバやツイストぐらい踊れるけれども、これは、やはりロックンロールの日本上陸のせいである。

〈ロック・アラウンド・ザ・クロック〉だとか、プレスリーだとか、〈ワンノクロック・ジャンプ〉だとか、その他もろもろのメロディは、私たちにとって常に肉体の運動と共に、私たちの心を熱狂させたのだ。

ただ坐って聴くだけの音楽に、時代をになう力はない、と、私は思う。踊れない音楽に上昇し、高級な哲学談議の対象に出世したとき、その音楽は博物館におさめられる。知的な音楽をめざす

ことに反対ではないが、そもそも音楽が知性と正反対のものであっていけない理由がどこにあろう。

タンゴの最古のナンバーは、おそろしく下品な歌詞で成り立っていたらしい。私のあいまいな記憶を、改めてたしかめずに書くと、

〈銭よこせ！〉

という意味の曲が、タンゴのクラシックの中のクラシックだったように聞いている。

〈生活向上委員会〉のバンドが、舞台と客席を駆け回り、

「金、クレ！　金、クレェ！」

と、絶叫するさまを見て、私はほとほと音楽の原点に触れたような興奮を禁じ得なかった。

ナチは三〇年代のベルリンから、キャバレーやモダン・アートと共に、退廃的音楽としてのタンゴを追放した。タンゴのもともとの成り立ちは、おそろしく政治的で、ラジカルな側面とともにあるのだから、第二次大戦前夜のベルリンで世紀末的、マニエリスムふうのタンゴが流行したのは歴史の示す通りだ。

〈サンチャゴに雨が降る〉

の映画音楽が全編タンゴで成り立っていたのも、また当然である。レゲエだけが情熱的なプロテストを歌っているわけではない。タンゴもまた、ファシズムのいみ嫌ったジャンルの音楽の一

つだった。

かつてペロン大統領は、ナショナリズムの立場からアルゼンチン・タンゴのバックアップを行い、一応のタンゴ復興期がもたらされたかに見えたが、やがてそれも冷却してゆく。

それは、私から言わすれば、自明の理である。

コンチネンタル・タンゴをイミテイションとして頭から馬鹿にするような視点から、現代のタンゴが成長する可能性はなかった。

ペロンは、ナショナリズムの立場からではなく、インターナショナリズムの視野からタンゴに肩入れすべきだったのだ。

〈赤い靴のタンゴ〉をコミンテルンの立場から見ると、どういうことになるか。いや、古賀政男は、そういう聴きかたをすべきではないだろう。私たちはただ、

〈赤い靴はいてた女の子

が、誰かに、どこかへ連行されてゆくメタフォアの異様さに心を打たれればそれでいいのかもしれない。

それにしても、踊る、ということと、聴く、ということの乖離(かいり)は、どうしても残念である。

先日、横浜ジョイナスの商店街の雑踏で、天井のスピーカーから降ってくるポコポコペコペコという奇妙なリズムに思わず足踏みして体をゆすっていたら、周りの人が不思議そうな顔で立ち止って見ていた。

後で調べてみて、それがイエロー・マジック・オーケストラの最新レコードだと判明、ただちに新星堂で買い求めてきたが、まことに調子がいい。昔、バッハでツイストを踊ったことを思い出した。

（一・四）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com